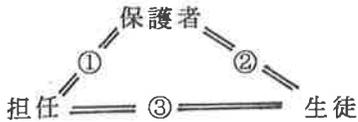


Ⅱ 家庭との連携

(1) はじめに

生徒、保護者との連携の強化は今年の大きな目標の一つである。私達の実践はあくまで学級担任として連携を考えるにある。いかに家庭と連絡を取り合い、信頼関係を築こうとしていったかということである。基本的な考え方について触れたい。



- (1) 家庭との連携はそのままかんがえれば①の確立を指す。しかし同時に②③の強化充実と深くかかわっていることはいうまでもない。理想的な形を作り上げるためには②の部分への担任としての働きかけが必要で

あり、この点が案外見落とされてきた。これは家庭の問題に私達が介入するということではない。親子の認識のズレや学校現場に関する情報不足があるならば、いろいろな情報を提供していくことはできる。その意味においてかかわりを持つことである。例えば「学年通信」「学級通信」などはその手段として最適である。実際、通信によって親子の対話が増えたという話しはよく耳にした。その事によってまた①③のパイプが太くなっていく。

(2) 連携とはそれぞれの立場の違いを認め、互いに相手の立場を理解した上での信頼関係を築くということである。ときには意見の食違いがあつて当然だろう。わが子中心にみる親と全体をみようとする私達は時に相反する立場になることもある

その違いを話し合うことのできる基盤が連携である。共に核には子供たちがいる。そのような話し合う場を作り上げていくことが担任としての「連携を求めて」ということだと思う。

(3) 保護者や生徒への働きかけは日常の学級経営に基盤を持つものであり、学級での日々の営みの中からスタートするものでなければならない。例えば「あゆみ」の返事を手抜きして「学級通信」を発行してもまったく意味がないだろう。

(4) 保護者との連携という場合対象が二つできてくる。

学級、学年の保護者全体—いわば学年PTA—という集団としての保護者であり、一方は個々の生徒の後にいる一人一人の保護者である。その違いによって私達の実践的な方法は違ってくる。今年度の実践目標である「学年通信」発行の対象は集団としての保護者であり生徒である。もう一つの目標の「日常的な家庭訪問」の対象は個々の生徒であり保護者になる。

若いときはともすれば個々への働きかけが強く、年をとれば全体への働きかけが多くなるような傾向に思える。時と場合により片寄りは見せつつも常に両者を念頭

においた連携でなければならない。全体に働きかけるときはその中に常に個々にも働きかける要素が必要であり、逆の場合も同じことである。

(5) 実践は名のおり理屈ではなくて実行である。担任自らが足を使い手を使つたもの、いわば「足で稼ぐ」ものでなければならない。その中から初めて問題点も見えてくるし、喜びもでてくる。

以上のような観点から私達は「日常的な家庭訪問」と「学年通信の発行」を取り上げた。

(2) 家庭訪問

① 教師の家庭訪問は通常あまり歓迎されない。何か事件事故があり、その説明や事後処理の為に外向くことが大半であつて親の側からすればまず「ドキッ」とするものなのだ。そのようなときは親はどうしても受け身にならざるを得ず、一方的に学校の話聞くだけ（聞かされるだけ）に終わりがちである。事件事故があれば保護者との連絡は当然必要であり、時には学校に「来てもらう」という形をとることもある。しかしそのような形での保護者との話合いばかりであれば私達の求める「連携」には程遠い。

② 本校では保護者との話合いの場が学校行事として設定されているのは、春の家庭訪問、1, 2学期の三者懇談（3学期はない）の三回であり、どこの学校もよく似たものであろう。学校行事として一斉にとるには限界がある。

公式な話合いの場では時間的な制約もあり、流れ作業的に話合いをこなしていくために、十分につっこんだ話合いがほしいときも上滑りに終わる事が多い。

学年PTAの会において全体で話し合う機会も3回あるが、参加数も少なく発言も低調になる。

以上のような実態から私達は家庭訪問を日常的な教育活動の一つとして取り組むことを考え実行していこうとした。

とはいっても何もなく、また目的もなくただ家庭訪問をしても保護者を驚かせるだけの事である。そこで次のような基準を決めた。

1. 事件事故の場合も原則として「呼びつける」のではなく家庭訪問をする。
その後、生徒が落ち着きを見せるまで訪問を継続する。
2. 体調を崩し、早退、欠席をした場合は次ぎの日の連絡をかねて訪問をする。
3. 遅刻が続いた場合の訪問。

このような基準のもとかなり頻繁に家庭訪問を行ってきた。初めのうちは恐縮していた保護者とも親しみもできてき、庭先で、縁側でいろいろな話しをする事ができるようになってきた。また、家庭における子供たちの生活の様子もかいま見るこ

とができ学校における指導にも役立つことが多かった。

とくに、遅刻が続いた場合の訪問は、親も知らないことがあり実効的である。友達との待合せやより道で家を定刻に出ているにもかかわらず遅刻しているという実態が多くあり、家庭との歩調を合わせた指導に当たることができた。

しかし、今年度末を迎え反省点も多い。思いつくままに書いて見ると、

* 後半から終わりになるにつれて回数の少なくなったことが大きな反省点である。面倒なように思える家庭訪問も実際にはそれほどの手間や時間をとる分けではない。それにもかかわらず回数が減っていくことは「馴れ」であった。同じ原因での欠席が続くとき毎日顔をだしていく必要はないであろうと考えてしまう。原因によっては毎日の訪問が家族や本人の負担になることはおおく考えねばならない。それはそれとして、そうでない場合も訪問を取りやめる弱さがあった。

* 家庭訪問はあいての時間を取ることでもある。当然に歓迎されない場合もでてくる。それは家庭により、時間により、内容により異なるがその点の見極めが不十分であったと思えることがある。

* 保護者との十分な話し合い一本音に近いものを引き出すことができたか。

* 短時間ではあるにせよ訪問の時間を生み出すことの問題。

その他保護者の側から見ればなお多くの問題点があるであろう。それでも、やはり私達は基本的に家庭訪問は連携を深めていくための有効な方法であると考えている。次年度への課題として、保護者の意見も求めつつより意味のある家庭訪問を考えていきたい。つけ加えれば、186名の生徒の対して家庭訪問を実施した生徒数は80名。延べにして142回になる。

(3) 参観授業への参加を求めて

保護者を対象にした参観授業への参加が驚くほど少なかった。子供たちは両親にたいして「恥ずかしいから来なくていい。」「ほとんどきてないから……」と参加を抑えていたようであった。とくに2年生は学年としての目に見える特徴もなく緊張感もなくということで他の学年に比べても少ない現実があった。このような状態にたいして保護者の方から声がかかることになる。

P T A 学年委員会において

「先生、私達は授業参観したいと思っても子供が来るなって言うんじゃない」

「来たら恥ずかしいというが、あれは、親を恥ずかしいと思うとるんだろか」

「子供たちの考えを聞いて“ねんりん”に載せてくれないだろうか」

「参観授業の連絡を何回もしてほしい」

「大勢が参加すれば子供たちも何もいわないだろう」

参観授業に参加したいという親としての思いが語られた。私達は、まず子供たちの率直な気持ちを作文として書かせそれを「学年通信 ねんりん」に掲載した。

以下「ねんりん」31, 32号の記事からおもなものを抜粋する。

* 参観授業に保護者が参加することに対する生徒の考え。

- 私の家では大体お母さんが来ますが、来たら恥ずかしいときもあります。でもこの恥ずかしいというのはお母さんが来ることが恥ずかしいのではなく、自分が授業を受けているところをそのまま見られてもし失敗でもしたら恥ずかしいなあと思うことなのです。でも来てくれたらうれしいときもあります。お母さんが来ているからいつもより頑張ろうと思ったりもします。こういう気持ちは私だけではないと思います。他の人だって多分こんな気持ちだと思います。「来なくていい」という人も半分照れ臭いんじゃないでしょうか。私はそう思います。来るなど言ってもほんとは来てほしいのかも知れません。
- 私ははっきり言って参観日に親は来てほしくないほうです。勝手なようですが人もそう思っていると思います。どうしていやなのかは、決して、親の服のセンスが悪いからきてほしくない、ただでさえ汚い顔を厚化粧して元の顔より汚くなるから来て欲しくないというのではないのです。言いにくいことですが、親に授業中の自分をあまり見て欲しくないからです。私はただの照れ屋なんですよ。だから悪い意味できて欲しくないというのではないのです。それを親には誤解して欲しくない。そうおもいます。
- 僕はお父さんやお母さんに参観日に来て欲しいという気持ちを持っています。でも、お母さんの方が何故か嫌がります。多分、恥ずかしいからとか、みんな来ないからだと思います。それと平日はお母さんも仕事に行っているから日曜参観でないと来られません。僕は来てくれると教科にもよりますが発表する勇気ができます。でも苦手な教科だとせつかく来てくれても発表できなくてはおかしいと思ったりしますが、やっぱり来て欲しいです。来てくれたときに僕のお母さんだけ派手な服を来ていたら恥ずかしいのでいやだなと思います。
- 私は参観日に見に来て欲しい。その理由は学校でどんなことを学んでいるか、それにどんな態度で受けているかを知って欲しいからです。しかし、友達に聞いたりしてみると「うちんくのお母さんけーへん」というのが圧倒的に多いからつい私も「来んでええわ」と言ってしまう。「何で？」と聞くので「ほなってみなけーへんって言よるもん」と言い返したりするからです。
- 私は参観日になると母に「絶対来んといて」と言います。それは参観日のとき、後ろで一人だけ自分の母がいるととても恥ずかしいからです。小学校のときはいつも母は来ていたけれど中学校は何だか恥ずかしくていやです。クラスの子のほとんどが来るのだったら私も母に「来て」というと思います。でも、今はクラスの子のお母さんほとんどが来ないから私の家の母は絶対に来て欲しい

くありません。私は母が来てくれてうれしいと思ったのは小学校の低学年のころでした。でも、できれば卒業するまでに一回は来てもらうつもりです。

- 私は値ゆ学校になって一度も参観日に来てもらったことはありません。別に来なくても言いと行っている分けじゃないけど仕事で忙しいときにいつも参観日が重なっているのも無理に来なくていいと言っています。別に来てもなくとも言いけれどやっぱり私が勉強しているところは見てもらいたいです。小学校のころは親が来てくれるのがすごくうれしかったはずなのに、中学生になってから恥ずかしいから来なくていいといっている人が時々羨ましくなる時があります。私は初めから来られないので、やっぱり私も一度でいいから参観日に来て欲しいです。

以上いくつかをあげてみたが、他のものも大体にたようなものであった。現状では過半数以上が否定的であったが、もし多くの人に来るなら来て欲しいという意見が多く純粋な否定派は少なかった。「恥ずかしい」という気持ちは詮索されることを嫌う、巣立ちのころに特有な気持ちであるのだろう。自我を確立しつつある歳である。

この後9月に入ってから参観授業、学年部会ではこの生徒の意見を再度紹介しつつ学年通信などにより繰返し参加を呼び掛けよ意味での「みんなで渡ればこわくない」点も強調した。その結果かってなく約半数の当たる90名の参加を見ることができたが父兄の参観日に対する参加が定着するまでつづける必要がある。参加が当たり前という形が出来上がるまでにはかなりの時間がかかるだろうし、学年の取組みにとどまらず学校をあげての取組みが必要である。

また、参観授業をそれだけに留めず事後において生徒や父兄に対して感想を求めよりよきあり方をともに考えていくことが大切であろう。

* 次に述べる学年通信や電話による父兄との連携の基盤には直接的な接触が無ければならない。それが家庭訪問や参観授業、学年PTA部会などである。相手の顔を見、表情を見て話した後での間接的な働きかけが重要である。そのような意味で部活動の対外試合の応援への参加は私たちと父兄が鎧をつけずにかかわることができる数少ない場である。自分の担当する部活動以外の対外試合に応援という形で参加し父兄とともに声をからして声援することの意味は想像以上に大きい。また生徒の教室外での様子を知る上でも意味がある。現実には土曜日曜の試合が多く全てに参加することは難しいができれば学年教師間で持ち回りにしてでも参加したい。今年度はその点においては不十分であった。また、連携の輪の中に部活動顧問が参加してくれることは大きい。担任として常に部活動顧問と連絡を取り合うことは連携の上でも大切なことである。

(4) 学年通信「ねんりん」

① 発行のねらい

学年通信は、学校と保護者、生徒を結ぶ架け橋である。学校から家庭への文書は数多いがその性格上一方的な連絡やお願いにならざるを得ない点がある。生徒への連絡にしても同じことで指示的な文章が多くなる。我々はその必要性を認めながら、なお互いの思いを語り、ぶつけあう場としての学年通信を作り上げていきたいと考えた。学年通信は教師が作るが、生徒も作り、父兄も作るものでなければならないと思う。本音を話す場とするには、思うばかりで道は遠いが少しでもそれに近付けたい。

- 親には学校の様子を知りたい、学校におけるわが子の様子をつかみたいという思いがある。親が知る中学2年生は、板野中学校は、我子の目を通して知るしかない。「みんながそうしている」というのは子供たちにとって、切り札的な言葉である。いちいち確かめてもない親にしてみれば返す言葉が無いことも多い。私たちは「我が子」だけでない中学2年生を知ってもらいたいと思う。その中から、より客観的に我が子を見ることができれば結局子供たちにもプラスになっていくであろう。また子供たちが日頃何を考え、どう行動しているのか、学校は今何をし、どんな願いを持っているのか、そんなことを知らせていきたいと思った。
- 子供たち相互の考えや思いは案外通じているようでそうでない場合が多い。家庭の問題や、成績の悩み、友達間の悩みはそのままの形で胸に抱えていることが多いようである。テスト結果が悪くて親に説教されたこと、自分の生活に係ろうとする親に対するいらだち、部活動での不満や不安…など数えあげればキリが無い。それらについて、多くの人が同じ悩みや不安を抱えながら頑張っていることを知っていくことの意味は大きい。「安心した」という消極的な意味でなく、みんな同じ気持ちの中で頑張っているという連帯感につながっていくものと思う。学年通信を通じて友達のいろいろな考えに触れていくことは生活に自信を持たせ、安定感を与え、連帯感を醸成する上で重要なことである。そんな願いを学年通信に込めた。
- 子供たちは、親からの便りを熱心に読む。親の子に託する思いが家庭においては語り合われることは考えていたより少ないようである。我が子に向かいあつての話は現実的にすぎるのかも知れないと思う。やや距離をおいての親の感想や意見は子供たちに考えさせることが多いのかも知れない。また私たちにしても家庭の思いに考えさせられることも多く襟をただす思いになったことも多い。
- 学校には多くの行事がある。また今年は、学年全体で取り組む同和問題学習もあった。ともすれば子供たちは行事にたいして受け身の受取り方をしがちである。修学旅行などは例外として、やらされる行事という感じが強い。それを払拭し自らの問題として積極的、主体的に取り組むには事前の働きかけと事後の反省を欠かすことができない。それらの各種行事の一つの「核」としての存在にしていきたいということがあった。単なる行事案内でなくその意味を知らせ取組みの過程を子供に知らせ親に知らせていくことは行事を盛り上げていくことにもつながる。

大きくいえば以上のようなねらいがあった。ただ、ここでつけ加えておかなければならないことは、「家庭との連携」ということは、親と教師が同じことをいうということではないということである。常に親と教師が同じ視点で同じことをいつていたならば子供たちは逃げ場が無くなるであろう。親と教師は明らかに立場が違う。私たちは、常に全体の中で、その子、を考えることが多く、それはそれで一つの見方として正しい。また親は結局は自分の子だけに焦点がいく。それでいいのだと思う。ただ、互いに相手の立場を知り、知ろうとして子供たちに接していく。そのことが、連携であると考えている。親と教師が具体的な問題についてはいうことが違っていてもよい、ただその奥に流れる気持ちをお互いが知り信頼しあって子供たちに接していくことが大切である。連携とは違いを認めつつスクラムを組めるということでないかと思っている。

② 実践

○ 以上のような願いからは通信の発行はできるだけ多い方が望ましい。今年度は300号まで発行することができた。作成は主として学年主任の手によるが資料の収集など作り上げたのは2年生の担任、副担任など2年生にかかわる全ての先生の手によった。願いからもわかるように行事のたびにそれにかかわる記事なども多くなり一日に3枚も出すこともあった。

○ 学年通信は「ねんりん」とした。
 「1年につく年輪ができる。広い時もあれば狭いときもある。広いのが良いのか、狭いのが良いのか。一樣に当たる日の光も一樣に成長を保証するものではない。」

○ 子供たちの意見、願いは「あゆみ」から取ることが多かった。担任が毎日の「あゆみ」のなかから適当な、ねらいに沿ったものを選び、それを転記していく。

ただ、その「あゆみ」に関する教師側のコメントは主任が勝手に書いていった。当然、担任の書くコメントとは異なることが多いわけで、子供たちにとっては一つの思いにたいし異なった見方をしられたことになり、結果的にはよかったように思う。

さらに、月一回の自由作文を各クラス一人の割合で載せていった。「両親にたいして思うこと」「私の未来設計図」などは家庭においても話合いのテーマを提供し、子供たちの間でもいろいろに思うことが多かったようである。

また、日常生活の中で目に付いたこと、気になった行動などを載せていくことによって、学校における子供の様子をしらせるとともに私たちも思いも伝えていったつもりである。子供たちからの気持ちはこれで充分とはいかないがかなりの部分を伝えることができたように思う。



- 親の願いは手紙の転載という形でできてきた。初めのうちは「投稿をお願いします」と言っても集まるものではない。個別に依頼し、一つの道を作っていくことである。私たちが考える以上に文章を書くということには抵抗がある。まして、それが全体に配布されるとなればなおのことであろう。気長く待つていくことが大事だと思う。
- 私たちの思いはいろいろな形で表される。「あゆみ」に対するコメントとして、「独り言」のコーナーにおいて、雑談的という具合にその時々思うことを書きつづっていった。

以上のことを「ねんりん」の項目で表せば次のようになる。

- ・ あゆみより…生徒の「あゆみ」とそれに対する私たちのコメント。
- ・ 連絡…月の行事予定、各種の行事の細かい予定。行事の意味や取り組む心構え、保護者の方へのお願いな、生徒への注意など。
- ・ 自由作文から…前述のとおり月一回各クラスから一名の作文を載せる。全文のこともあれば一部抜粋のこともある。
- ・ 独り言…その時その時の私たち教師の思いをつづる。
- ・ スナップ…生徒や先生たちの様子を書いたもの。
- ・ 保護者の方からの便り…保護者の方からいただいた便りを転記したもの。

以上が定期的なものであるがその他に行事に合わせ特集や、各クラス特集も組んでいった。

例えば、シリーズとしての「担任紹介」PTA学年部会資料、遠足を終えての感想、修学旅行への心構え、修学旅行の反省、校内陸上大会の結果など数えあげればきりが無い。また、学級特集号は学期に一回を原則とし担任が作成した。学級特集号では担任は全員の名が「ねんりん」に載るようにとの配慮からひとクラス3枚にもなったりした。佐野先生は「あゆみ」が転載された生徒をすべてチェックし、まだ載ってない生徒のものを優先して考えていたようであり、載ってない生徒はだれなのか実によく掘っておられた。生徒も自分の「あゆみ」が掲載される事は恥ずかしくもあり、うれしいことであつたようである。なお、「あゆみ」は無記名とし、自由作文は氏名を入れた。

あゆみより
 テスト終了後のいろいろなあゆみ、テスト
 甲のでもあります。

※今日父さんというように遊んだファミコンのファミリ
 ースタジアムをした。ほくち一回目、二回目勝った。
 せしたら父さんがファミコンや何ならしといわけして
 タクミの部屋で友達着に、二人とも着替えて来木
 道もやった。お父さんは昔柔道やってたし、力も強い
 のでなかなか投げられなかった。でも10分位したとき、
 ほくち父さんもこかした。せしたら又こけて困まし
 ました。かんりん2号、のベルネ猫に引き続い
 て、お父さん、ソリマセンか……うそです。
 テレビのホームドラマに出てくる 親子み
 たいな感じを、ホッとするような暖かさが伝わりそく
 る。こけて困る、お父さんというのオすはらしい！

(74号)

独り言
 * 二十一日に登校して校舎の周りがうつくしくなっ
 ているのに何人の人が気付いただろう？除草、植木の
 刈り込み、ペンキ塗などをPTAの方がやってくれた。
 十九日朝の七時から昼までかかって体中まみれに
 なり汗だくになってみんなの学習環境を整えるために
 休みをつぶしてくれたのです。
 校舎の中も照明を増やすなど環境の改善がはかられ
 ている。わかりきつたようなことだがもう一度考えて
 みたい。なぜなのか？
 みんなの周りにいる人ができることは一人一人が心
 おきなく勉強できる環境を作ることしかない。一本の
 草を抜く手にもみんなへの熱い期待があるとおもえ！
 入れ物が整えばそれに見合った中身にならなくては
 なるまい。お父さん、お母さんが流してくれた汗の分
 がけは成長していきたい。
 PTAの方々がありがとうございます。

(107号)

その他、別にシリーズを予定していたわけではないが実に多くの「お詫びと訂正」があった。字の間違ひならいざ知らず生徒の氏名の間違ひや行事のミスがあり、まさに平身低頭の思いであった。大切なことはもしミスに気付いたらただちに訂正文を出すことである。それが幸い下かどうか、実によく生徒からの間違ひの指摘があった。

○ 長期休業中の「ねんりん」

私たちが生徒と一番接触の必要とされているのが長期休業中である。その間の「ねんりん」どうするか？ 学年部会を開き休み中も「ねんりん」を郵送しようということになった。生徒も日常活動が十分わからないため、内容としては不十分なことが多い。

学年通信であるということは常に学年の全生徒や父兄を対象として発行されている。そこで長期休業中の通信にかぎり、夏休みであれば暑中見舞いということで個々の生徒あてのコーナーを作り、一人一人に担当がメッセージを書き郵送することにした。

このような通信の中における個人へのメッセージがせめて学期に一度でも作ることができればと思いつつ果たせないでいる。

「先生から ねんりん が届きました。ゆっくりゆっくり読みました。最後にてがみが書いてありました。みんなに書いたのかと思ってびっくりしました。こんなのももっとあったらいいなと思いました。」という生徒の感想があった。

- 形式的面からいえば読みやすい紙面を心がけることが大切である。そのためにカットを一枚につき4カ所ほど入れるのを原則とした。初めは市販のカット集からのものが多かったがそのうち生徒が「あゆみ」にイラストをかいてくることが多くなりそれを使うことが多くなってきた。子供たちもイラストのうまさに驚嘆しつつ、子供たちを取り巻く環境や文化を思い、喜んだり嘆いたりということであった。

○ 一例として（掲載したものから）

* 生徒の「あゆみ」より

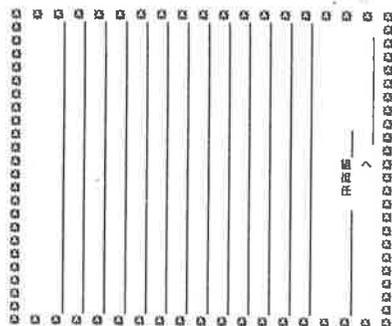
「今、私は毎日の生活があまり楽しくありません。行事などがあるときは何日も前から楽しいだけ

訂正とおわび——早々にミスがありました。
 ＊佐野先生が何やらワックス笑いよると思つたら、四月行事予定で、家庭訪問とすべしと、成計訪問としていたのです。まるでエニゲル係教をも調べに行きたいなと大笑い、あー取っ（3号）訂正しておわびいたします。

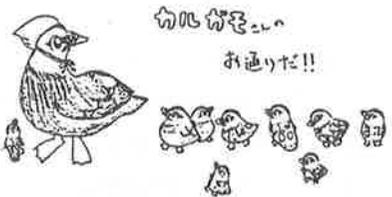
全国大会に出場して

さる8月8日に板野署管内の中学生チームの一員として警視庁武道館で行われた全国大会に出場した渋谷君と池田君の感想文です。

＊ねんりんの102号から104号まで読者みんなの手元まで届いたでしょうか。各担任の先生から一人一人への暑中見舞いのメッセージがあります。忙しいなかで書いてくれました。先生たちの仕事の都合でクラ



(104号)



(75号)



(74号)



(75号)

ど、その行事などが終わると何も楽しみが無くなってしまい、毎日がしんどいものになってしまうのです。何をしてもポツカリ穴があいたような感じでだらだらしてしてしまいます。母にいうとそんなものだといいます。先の楽しみは待っている間が楽しく、また長く感じ、その楽しみが過ぎてしまえばさみしく、短く感じるのだそうです。母はまた今というときは2度と来ないのだから先の楽しみより今を大切にしてくださいといいます。私はババ臭いなあと思いました。どうせ勉強なさいということにつながるものがわかっていたので私はさっさと逃げました。だけど後で考えると、母の言ったことも大切だと思えました。こんなことを書くと変に思われるかも知れないけれど、時々こんな気持ちになるときがあります。みんなはこんなこと思わないのかなあと不安になります。」(49号)

* こんな「あゆみ」もある。

「最近特に気になるのが女子の口の達者なことである。口では完全に負けている。美術で女子と班を作っており僕は班長なのだが、命令する立場が反対に命令されているような立場にあるのである。ただ単にいやな班長役を任されているだけのよう思うのだ。男子が弱すぎると言ってしまうえばそれ迄だが、男子には男子の、女子とは対等に口ゲンカできないところもあるのです。例えば、僕。ひつこく班長らしく命令したいけど、余り女子に嫌われるというのは好い気がしないのです。男子だってやる時はやります。しかし、じっと我慢して、女子の言い分を聞いてるのです。男子の心理わかってくれたかな。」

(167号)

* 父兄からの便り

「子供に「あゆみ」を見せて欲しいと思うが「いや」の一言で断られることが多い。が、ねんりん、学級通信などに自分の文が載ると「読んでよ」とうれしそうに言う。どうしてだろう？理由はどうであれ、子供とのコミュニケーションとして大切なものである。今後ともよろしくお願いします。」

「ねんりんを通じて子供たちの今までわからなかったような気持ちに触れて、考え方接し方が変わってきました。それに子供たちのすばらしい成長をたのもしく思っています。」

(57号)

* 独り言

「人間 ぬくぬくしはじめると ろくな仕事はせぬ
追いつめられると
龍が玉を吐くように いのちを吐く

これは宝仙短期大学副学長の紀野一義氏の言葉である。前号で少し触れた筋ジスト關う青年たちは、まさに命を吐いていることになるのだろうか。6時間の授業を真剣に受け、引き続き部活動に汗を流す。帰宅してからも家事を手伝い、なお自分の時間を見つけて机に向かって人を知っている。追いつめられた意識は無いであろうが、ぬくぬくとはしていない。中学生には中学生としての「いのち」がある。」(172号)

○ 以上、いくつか例をあげたがバラエティーにとんだ内容になるように心がけた。たんだ

んとした連絡もあれば、注意や説教もある。また思わず吹き出すような話もあり、先生方の様子を書いたこともあった。今年は、先生方におめでたいことが多く、それら載せることによって学年全体でお祝いをする雰囲気もできていったように思う。楽しく読むことができる、父兄も生徒も発行を心待ちにしてくれるような通信にすることは不可欠の条件である。次のページの100号は記念号として出したリラックスした「ねんりん」の一例である。

③ 保護者や生徒の感想

自由作文や「あゆみ」にでてきた生徒の感想や保護者からいただいた手紙から「ねんりん」に対する感想や要望の一部を拾ってみる。

- 今まで「ねんりん」を読んできて、こんないい学年通信はどこにもないだろうと思った。私は今までの「ねんりん」は全部持っています。「ねんりん」は、ためになること、あるいは、楽しいことなどいっぱい書いてあり、私にとっては大切なものです。「ねんりん」1号から読み返してみると「今までよー続いたなあ」と感心感心。私の文が今までに載ったことが一度ありました。その時はうれしかったらありやしない。帰ったら急いでお父さんとお母さんに見せました。そしたら「よかったなあ」といつてくれました。私は本当にうれしくて、お母さんの妹にまで見せてしまいました。私はうれしくて、はしゃいでいたので、他の人からみたら変な人と見えたかも知れません。いつもいつも「ねんりん」がでるのを楽しみに待っています。
- 私はいつもねんりんを楽しく読ませてもらっています。ねんりんをみると、みんなのあゆみとか自由作文を見るとおもしろいことが書いてあっていいと思います。また、あいているところに載っているイラストもみんな上手にかいていて、私は、もっとイラストを書くところを作ったらいいなと思っています。この「ねんりん」ももう何十枚も溜っています。これからもずっとこの「ねんりん」を続けて行って欲しいです。
- そして、もう一つは「ねんりん」のことです。一番初めに「ねんりん」をもらったときは「どうせあんまり続けけへんわ」と思いました。でもずっと続いたのでびっくりしました。
- 私は、毎日のように出る「ねんりん」をずっと一号から溜めています。私は「ねんりん」を読むのが好きで、毎日配られるのがとても楽しみです。それは「ねんりん」がとてもおもしろいからです。そして自分の書いた絵や文が載るとうれしくなります。「ねんりん」はもう74号まで着ているのだから、この一年間で200号は超しそうです。ねんりんがずっと溜って幾度に、どんどん日が過ぎていくなあとと思います。「ねんりん」一枚に一日のそれぞれの思い出がつまっているような感じがします。
- 「ねんりん」を見るのがとても楽しみです。おもしろい文がたくさんでできます。しかしそれを評する仁木先生もとても楽しいです。でも、見るのが楽しい分けであって書かれるのは恥ずかしい。だから、自習の時間に仁木先生が来たら失敗しない

用にピクピクしています。仁木先生と目があつたら反らしたり、下を向いたりしています。いつだったか、森口先生が生活ノートに「ねんりんは、仁木先生の強力な武器ですね。」と書いてあつたことがありました。ほんとにそのとうりだと思います。私は「ねんりん」があるから仁木先生なんだと思う。「ねんりん」も怖いところがありまたそこが「ねんりん」の魅力なんです。とても楽しいようで、とても怖い「ねんりん」が私は大好きです。これからもそんな「ねんりん」をたくさん書いていってください。

* 保護者の方からの便り（感想など）

○ 「ねんりん」で子供たちの様子がよくわかります。また、友達や他の生物に対する思いやりの気持ち、やさしい心が文面から伝わってきます。（ねんりんについてのお願ひ）先生方のご苦勞で50号になろうとしています。学級理事会でも決まりましたが、保護者の寄稿の件難しく考えないで思ったこと気がついたことを二行でも三行でも書いたらどうですか。学期に1, 2回程度、各クラスの特集を出してほしいと思います。できればテーマを決めて。子供、保護者の意見に担任の先生のアドバイスがあれば幸いです。それを2年生全員に配布してほしいです。

○ 私は2年生学年通信「ねんりん」の愛読者の一人です。「ねんりん」の発行も編集の先生のお陰で春の始業式以来170号を迎え楽しく読ませていただいています。毎日が楽しみで学校が休みの時はちょっぴり寂しいです。「ねんりん」を毎日読ませていただいて一番楽しいことは「あゆみより」です。「あゆみより」は子供たちの学校での生活家庭での生活、今の子供たちがどんな考えを持っているか、私たちの目のとどかないところがありのままに頭の仲に浮かんできて、なるほどと考えさせられます。そして、先生方のコメントがおもしろい……。 「ねんりん」を読めば必ず一度は腹を抱えて笑います。今日まで私も一度は投稿して何か楽しいコメントをいただければと思いつつなかなか文にならずおっくうでしたが思い切ってペンを取った次第です。

「ねんりん」にお願ひといえは先日先生にお会いしたときお話したように「ねんりん」をワープロで打った方が現代的だとは思いますが、ワープロでは何かつめたいような、親密な繋がりが薄い気がします。ペン書きの方がありのままの様子が良くわかり、何か暖かい温もりが伝わってきますとお願ひした折快く引き受けてくれました。家庭とのパイプ役としてこれからも頑張ってください。私たち父兄も楽しみに毎日読ませていただきます。

○ 2年生学年通信「ねんりん」を毎日楽しく読ませていただいております、父親です。中学生の男の子というのは父親とはあまり話しをしません。「ねんりん」のおかげで話合ひができるようになりました。学校での生活、家庭での生活、子供の考えが良くわかります。親に話せないことを「あゆみ」に書いてあり、それを「あゆみより」にピックアップしてくれて、先生方のコメントを書いてくれる。子供たちにとっても励みになりうれしく思います。そのコメントも日常会話をしているようで身近に感じます。温かみ

も感じます。スナップ、お詫びと訂正、イラスト、マンガどれもこれも感激しています。大変お忙しいのに毎日編集していただきありがとうございます。お忙しいことが「お詫びと訂正」でよくわかります。これだけ先生方が頑張ってお書いてくださっている楽しい「ねんりん」。父兄の皆さんは読んでくれているだろうか。読まなければ損をしたような気がします。私はこれからも楽しみに読ませていただきます。編集の先生、大変お忙しいとは思いますが、私達父兄の為、子供たちの為なお、一層頑張ってお楽しみ「ねんりん」を続けてくださるようお願いいたします。

④ 自戒を込めての通信作成上の留意点

- * 継続させてこそ意味がある。しかも、他の校務をおろそかにすることがあってはならない。日常の教育活動の充実の上に立つ通信の発行でなければ結局は上すべりのものとなり本来の目的を達することはできない。
- * 生徒の個人名を出すときと、出してはならないときの判断を正確にする。名を出されることはうれしいと感じる反面恥ずかしいという思いもある。内容により、個人により判断の基準が異なることが多い。個人名を出すときは原則として担任に相談する配慮が必要である。なお、「あゆみ」との関連であるが既に「あゆみ」の項で述べたように、「あゆみ」は生徒と担任との私的な手紙に似た一面がある。従って生徒には「あゆみ」から転載するときの基準を示し必ずそれを守るようにしなければならない。個人的な問題を一般化して取り上げる場合といえども生徒の思いに十分配慮する必要がある。「あゆみ」は私信である、という原則を崩すことがあってはならない
- * 通信のあり方について生徒や保護者に意見を求め得る範囲で要望に沿っていかなければならないが、それが迎合にならぬよう毅然とした一面が必要である。
- * 通信が生徒、保護者に受け入れられれば受け入れられるほどミニマスコミとしての力を持つ。そうなったときこそ自信過剰に陥ることのない謙虚な紙面作りが要請される。常に他から学ぶ姿勢がなければならない。
- * 読みやすく親しみやすい紙面を作る。手書きとワープロのどちらが良いか。それぞれ一長一短があるが今年の場合は手書きの紙面に支持が多かった。一つにはなれの問題もあるが、活字を見慣れている目には手書きの持つ温かさや感情の表われる手書きの字に親しみを感じたようである。
- * 最後にはできれば一冊に製本したい。この一年の歴史を刻むつもりで通信作成である。